opusdei.org

属人区長の手紙 「2016年11月〕

いつくしみの大聖年閉幕について触れながら、属人区長は 「神のいつくしみを個人的に 受け入れ、同じように人々を 受け入れること」を私たちに 促す。

2016/11/03

愛する皆さん、イエスが私の子ども たちをお守りくださいますように!

教皇様が聖年の扉を、まずアフリカ の中心で、次いで聖ペトロ大聖堂で

ここ数カ月間、私たちは、教会のをに秘められている神の愛の神秘をの強いと努めました。確かにの海がになる。ないます。私に大海原の私たの海ができれた。本に大力をできました。またない、自らの生活の中でもは、からしみを認めました。少し振り返

るだけで、洗礼を通して教会に招かれてから、またはそれ以前から、神がいかに私たちの近くにおられたか、また現存し続けておられるということを、驚きをもって再発見することができます。

聖ルカ福音書15章にはイエス・キリ ストの明確な教えがあります。神の いつくしみについて、迷える羊、失 われたドラクマ貨、放蕩息子の三つ のたとえが記されています。聖アン ブロジオがこうコメントしていま す。「この父親、この牧者、この婦 人とは誰のことですか。もしかし て、神なる父、キリストと教会を表 しているのではないだろうか。キリ ストはあなたを肩に担い、教会はあ なたを探し、御父はあなたを受け入 れます。キリストは牧者として、絶 えずあなたを支え、教会は母とし て、絶え間なくあなたを探し出して 守ります。こうして御父が再度あな たを装わせてくださいます。キリス

トは、そのいつくしみの業によって、教会はあなたの世話をしながら、御父はあなたとご自分を和解させながら」^[1]。

この数カ月間は、神と人々への愛を改ち活きとさせるのに役良を立ちました。確かにこの愛が少しちにもないたでしょう。多分、私たののあることを再発見したはかまう。「御父のようにはかけん。「御父のようにあわれるはなるようにと言う招きは全体に及ぶことです。

聖年の閉幕は、何か他のことへ移行するための到着点ではありません。 そうではなく、キリスト者として前進すべき道を、新たな喜びをもって歩むための出発点なのです。洗礼によって全てのキリスト信者には共通の司祭職があり、神との父子(おやこ)関係の深い意味に基づくいつくし みの業を実行するよう促されていま す。聖ホセマリアは「全ての人を、 誠実に愛し、見返りを求めたりせず に仕えるべき兄弟だと思わなければ ならない| [2] と繰り返していまし た。この特別聖年の閉幕を数週間後 に控えた一般謁見での教皇様のコメ ントです。「人生の中で神のいつく しみを体験するだけでは十分ではあ りません。いつくしみを受けた誰も が、他の人々のためのしるしや道具 とならなければなりません。このよ うに、いつくしみは特別なときのた めだけではなく、わたしたちの日々 の経験全体を包み込んでいます| [3]

それで私は自問し、あなた方にも勧めます。聖年は何を残しましたか。神は「優しさと限りない愛にあふれた」 [4] 父として私たちを見ておられるという確信がしっかりと身に付いたでしょうか。日常生活や家族生活において、専門職や使徒職におい

聖霊が教会を後押ししているこの指針に沿って毎にしっかりとしたといることを担いているで前進するため、あえないではでいるとを提案しまみをされたとを提案のようにもとなりでした。 の教主を提案のあるとはでいると数かではないで、ここの教主をはないであるとはです。 の教えを持っているのではでいるとはです。 はずでするとに関心を持って生きることです。

私たちへの神の愛は、厳しいと同時に穏やかです。厳しいのは、両肩トと明ったイエス・キリスを担ったイ変に協力して贖いの実に協力して贖いる方にもなったが、私たちの限界をご存知がです。私たちの限界をご存知とも理解深い母親以上に優れたけです。私たちの努力だけです。私たちの努力だけで

は世界を変えることはできません。 それは、石の心を肉の心に変え得る 神のなさることです。

主が要求なさるのは私たちが決して 間違わないことではなく、間違って も挫けず、いつも立ち上がることで す。神の子としての落ち着きと信頼 をもってこの世の旅を続けます。

「自分が真理に属していることを知 り、神のみ前で安心できます。心に 責められることがあろうとも。神は 私たちの心よりも大きく、すべてを ご存じだからです」[5]。内的な平和 は、全てをよく果たしたと考える人 のものでも、愛に関心が無い人のも のでもありません。それはいつも、 躓いたときにも神のみもとに立ち戻 る人のものです。イエス・キリスト は健康な人ではなく病人を探そうと お出でになりました^[6]。そして、人 が躓くにも関わらず、日々、愛を新 たにすることをお喜びになります。

ゆるしの無限の泉である秘跡を頼り にするからです。

いつくしみは他人を受け入れ、彼ら に近づくようにも促します。神から いつくしみを受けたのですから、そ れを伝えることができます。こうし て「いつくしみと正義を充分に頂い たのだから、キリスト信者は不幸な 人に同情し、他の罪人のために祈る ことができるようになっています。 敵に対してさえもいつくしみ深い人 であり得ます」^[7]。壮大にあわれみ 深い神のみが「失った善を取り戻 し、犯した悪を善で贖い、改めて正 義と聖性の力をもたらすことができ ます」[8]。

仕事とか種々の困難の重さで、茨に ふさがれた良い種のように、心が幾 らか麻痺してしまう事も少なくあり ません。神が私たちに敏感な心をく ださったのは、人々に近づくためで す。それは、問題があったり悲劇に 見舞われたりしたときだけではな く、日常生活の細々とした数知れな い事柄においても求められているこ とです。それには、思いやりの心で 周りの人を見ることが必要です。思 いやりの心を持っていれば、現実に は大事でもないことに心奪われず、 本当に重要なことに気づこうとする ようになります。神が私たちに頼ん でいるのは、ただ他の人と一緒に生 活するということだけでなく、彼ら のために生きるということです。私 たちには「心から微笑んですべての 人を受け入れる愛情のこもった愛 徳 | ^[9] が求められているのです。

ですからいつも祈りを頼りにしましょう。手におえないように思える状況に遭遇したり、人に出会ったりするときには特にそうします。道の途上で出遭う困難を主に委ねるため、それを乗り越えるため、また必要以上にそれを重要視しないため、助けをお願いしましょ

う。憐れみの御母・聖マリアの取次 ぎによって、神のような愛をお与え くださるよう主に頼みましょう。

教皇様は、ポーランドへの使徒的旅 行で「神のいつくしみの明確な本| として福音書について話しておられ ます。「この本は未だに最終ページ が白紙です。そこを私たちが聖書と 同じ文体で埋めるべきなのです。つ まり、慈善行為を続けながら」[10]。 そして「私たちは一人ひとり心に、 神のいつくしみの本のきわめて個人 的なページを秘めているのです | [11] と締めくくっておられます。不器用 な私たちが残してしまった書き損じ やしみにがっかりすることなく、神 が私たち一人ひとりに任されたこの ページを喜んで埋めていきましょ う。神のあわれみによって、私たち の惨めさにおいて聖霊が働きかけま す。「わたしは弱いときにこそ強 い| [12] からです。キリストの恩恵

で私たちは強められ、頂いたものを 伝えることができます。

この注意深い他人への奉仕におい て、忘れてならないのは 一特にこの 2日と今月中一 ひそやかで神が非常 に喜ばれる慈善行為、死者のために 祈ることです。一人ひとりが、諸聖 徒の交わりを実行する恩恵を主にお 願いします。私たちの代願の祈りを 必要としている人々、天国の至福を 味わっている人たち、そして、教皇 様とその協力者の方々をはじめ、未 だ地上での歩みを続けている人々だ けではなく、全ての人々、特にこの 助けを必要としている人々も私たち の祈りの輪の中で交わっています。

先だっての属人区の助祭叙階を神に 感謝することなしにこの手紙を終え ることはできません。彼らと世界中 の聖職者のために祈りましょう。そ れと同時に、二週間前のフィンラン ドとエストニアという新しい地域分

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

ハビエル

ローマ、2016年11月1日。

- [1] 聖アンブロジオ、『聖ルカ福音 書の解説』VII,208(PL 15,1755)。
- [2] 聖ホセマリア、『会見記』29番。
- [3] 教皇フランシスコ、2016年10月 12日一般謁見の講話。
- [4] 聖ホセマリア、『鍛』331番。
- [5]1ヨハネ3,19-20。
- [6]マタイ9,13参照。
- [7] 聖クロマシオ・デ・アキレヤ、『信福八端についての説教』41,5(CCLIXA, 177)。
- [8] 福者パウロ六世、パウロ六世研究所所蔵の「未刊行の手書き文書」 ニュースレター71[2016],7-8(2016 年9月のIX-2016,L'Osservatore Romano紙上の記事)。
- [9] 聖ホセマリア、『鍛』282番。

[10] 教皇フランシスコ、2016年7 月30日説教。

[11]同上。

 $[12]2 \exists y > 12,10$

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/zokujinkuchouno-tegami-2016-11/(2025/12/12)